

# 聖刻群龍伝

龍虎の刻 1

千葉 暁

*Satoshi Chiba*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

DTP 挿口  
P 画 絵  
ハンズ・ミケ 三好 載 克

# 聖刻群龍伝

龍虎の刻1

龍の仔篇 烈火の章

プロローグ

第1話 新たなる世代

第2話 エリダーヌの若獅子

あとがき

5

19

95

216



## プロローグ

帝国暦二三年一〇月三日——

帝都ルーフェンにおいて式典が執り行われた。

皇宮焼失後の跡地に建てられた碑の除幕式だ。式の内容自体華やかさに欠けるため、主催側も出席を呼びかけはしたものの、旧帝国政府のように強制はしなかったため、野外に設けられた二〇〇の席が埋まるか懸念していた。

だがしかし、蓋を開けてみればさらに一〇〇の席を追加してもまるで足らず、会場自体を拡張ざるを得ない事態に陥った。

「新政府、早速の不幸際ですな、伯爵」

とある外様の国主が陰口を叩く。

それに応えるのは譜代の、今では残り少なくなつた帝国上級貴族だった。

「左様、平等と博愛、ご大層な理念を掲げようともし、

実行力が伴わなければ絵に描いた餅よ。少なくとも前の執政官はこうしたことに遺漏なかつた」

いつの時代も、辛口の批評家はいるものだ。兩名とも、帝国軍が《ザルツェンの戦い》で大敗を喫するや即座に連合軍への協力を申し出たというのに。

忌々しく思う理由は他にもある。集まつた招待客の顔触れだ。執政官側についた貴族がのうのうと姿を見せている。新たな帝国の支配者は、恭順した者に対しては寛大さを示し、財産や門地の没収も行わなかつた。そればかりか、皇宮と運命を共にしたサイオンとソーキルドの所領も遺族の相続を認める裁定を下していた。勝者のおこぼれにあずかるうとしていた彼らにしてみれば大いにてが外れた格好となつた。加えて——

「平民が貴族と同じ席に座るとは、ひと昔前ならば考えられないことだ」

客の三割近くが平民の富裕層だ。近年経済力によつて頭角を顕し、どの国も彼らの協力なくして戦を

始められないほど結びつきを強めていた。カイラー  
ス帝の頃より皇宮の出入りが許されてきたが、多額  
の献金に対する見返りに過ぎず、特権階級への仲間  
入りを果たしたわけではなかった。

「征夷大將軍閣下は敵だった者ばかりか、下々にも  
寛容な方ですからね。期待も大きいのでしょうか」

外様の言葉には揶揄の響きが込められている。時  
代が大きく変貌したことを受け入れざるを得ないと  
しても、成り上がり者が我がもの顔で自分の庭をう  
ろつくことまでは容認できない。

言い終えたちようどその時、若い官吏が頭れ、式  
典会場の仕度が調ったことを告げる。

控え室代わりに使われていた庭園から、着飾った  
人々が動きはじめる。

ここは皇宮の中庭だった場所だ。何割かの樹木が  
焼け落ち、あずまやや噴水も煤まみれになったが、  
以前と同じ姿に復元されていた。式典後は記念公園  
として市民に開放されるという。

「思ったよりは早かったな」

「新貴族が張り切ったのでしよう。新しい主君に役  
立つところを見せないと職を失いますからな」

「他人事ではないがな」

新たな帝国の支配者、デュマシオン・イスカ・コ  
ーバックの執政は始まったばかりだ。権力の枠組み  
は未だ定まっておらず、枠から外れれば転落を余儀  
なくされる。

外様の国王は不快感を顕わにして、

「我ら抜きで帝国が運営できるわけがありません」

「だとよいが」

少なくともこの間までの支配者サイオンは、諸侯  
を不要と見なしていた。彼が欲していたものは自分  
の目が届かぬ地域を統治する忠実な代官であり、謀  
反の疑い——というより可能性がある国主を潰しに  
かかっていた。そうした危機感が、彼らの旗幟を鮮  
明にさせたといえる。

「自尊心に囚われ、情勢を見誤ると命取りになる」

伯爵はそう忠告するつもりだったが、結局は口にはしない。自分も含め招待客の多くが、デュマシオンを恐れるからこそ、こうして面白くもない式典に足を運んできたのだから。

いや、天下人におもねる気持ちばかりでもない。ドレス姿の比率が高いことがそれを裏づけていた。会場はかつて主副ふたつあった宮殿のうち、前者の基礎だった部分だ。

「地面に敷き詰められた陶板は、かつて宮殿の外装を飾っていた廃材だと聞きました」

外様の質問に譜代は応える。

「らしいな。元々この皇帝色と呼ばれる深い青の陶板は帝国御用達の窯でしか焼いておらぬ。備蓄していた分を含めても、何十万枚という量を新たに用意することは不可能だな」

国主はさらに声をひそめて、

「碑となった黒御影石にしても、謁見場の床材だったとか……儉約も結構ですが、そこまで徹底して

は征夷大將軍の品位が損なわれるかと」

要はデュマシオンを吝嗇家と揶揄したいのだろうが、何代も帝都に居を構える家系の人間は異なる見方をしていった。

「大戦のあとで台所事情が苦しいのは事実だろうが、記念碑ならば縁ある品を使うことに意味がある。それに——存じておるか、陶板張りには帝都市民が大勢参加したことを？ 人件費節約と言ってしまうばそれまでだが、市民にとって皇宮の焼失は心の支えを奪われたに等しい。従事させることで気持ちの整理をつけさせ、痛手を和らげようとしたのではないか、わたしはそう見ている」

外様は口を噤まざるをえなかった。

「それにしても……」

譜代は戸惑いの色を隠せない。

肅々たる空気が立ちこめていた。石碑の前に並ぶ、デュマシオン他、主催者の面々が厳めしい表情を浮かべたまま黙しているため、自然と招待客もそ

れに做<sup>な</sup>う形になつたのだが……。

「宮殿の落成式などと違つて単なる記念碑の除幕式だから浮かれる理由もないが……」

その疑念は、主催者側のひとりが取つた、ある行動によつて晴れる。

頭髮を覆<sup>おほ</sup>う被り物からドレス、手袋に至るまで黒一色に染まつた貴婦人が、百合の花束を石碑に捧<sup>ささ</sup>げた。やはり黒い薄布<sup>ヴェール</sup>で顔を隠しているため表情を窺<sup>うかが</sup>うことはできないが、石碑に歩み寄る時から俯<sup>うつむ</sup>き、献花後も肩を震<sup>ふる</sup>わせてその場を動こうとしなかつた。

その女性こそ、先代皇帝ナルサスの姉にしてデュマシオンの妃<sup>きさき</sup>、サクヤール・イスカ・コーバックだつた。会場がざわめく。大挙<sup>たいきよ</sup>して客が押しかけてきた理由が、三年半ぶりに里帰<sup>りかへ</sup>りした元皇女をひと目見ようという好奇心に由来していたのだから。注目度だけならばデュマシオン以上だ。

「……なるほど。正<sup>まこと</sup>しく葬儀であつたか」

ひとり合点がいったように譜代がうなづく。

その眩<sup>つぶや</sup>きを聞いて、隣席の国主も、

「殿下にとってはそうなのでしような。お気の毒に弟君、先帝のご葬儀に出られませんでしたからね」  
同情を示しつつも、自身も目頭<sup>めがしら</sup>を熱くしていた。

上級貴族はかぶりを振る。

「葬<sup>ほうむ</sup>られたのは帝国そのものだ。焼失した皇宮を再建せず、代わりに碑を建てる。すなわち帝国を継ぐつもりはない、という意思表示に違いない。そう考<sup>かんが</sup>えれば、帝国議会の所信声明において、娘スクナー王女の皇籍取得を否定したことも合点がいく」

そもそも宮殿や城は権力の象徴だ。サイオンが旧主の宮殿に留<sup>とど</sup>まり続けた理由も、連綿と続く帝国の権力機構の継承を目論<sup>めづ</sup>んだためだ。

「とどのつまり、アウスマルシア伯は帝国という器<sup>うつわ</sup>をそのままに、淀<sup>よど</sup>んだ水を新鮮なものに入れ替え延命<sup>えんめい</sup>を図<sup>はか</sup>つただけだ。執政官などと称しても皇帝になり代わろうとしたことは誰にでもわかる。だが、



デュマシオンにそうした野心はなく、そればかりか器自体を新しくしようとしている」

外様は怪訝けげんな表情をして、

「それほどのような意味が？ デュマシオンに帝国を統治する意思があることは明々白々。ならば至高の冠ロケットを被ったほうが万事楽ごいまいまでしょう」

「とは限らぬぞ。執政官も改革の美名のもと大鉦おおなを振るつたが、結局は民心を離反させてしまった。さほどに世の仕組みを変えることは難しい。いっそ土台から築き直すほうが、当初の苦労は多くとも長期的には抵抗が少ないかも」

譜代の貴族は一旦言葉を切り、会場を見渡す。

「デュマシオンはこの式典を時代が変わる区切りと位置づけているのだろう。帝国を過去の遺物とし、新たな国作りをする。言葉ではなく形で示しているのではないか——わたしはそう結論した」

「……………」

深読みが過ぎるのではないかと外様の国主は思

つたが、さりとて反論の材料も見つからない。

ひとつはつきり言えることは、デュマシオンがロタール皇家に代わる、新王朝を樹立するだけの実力と権威をそなえているということだ。

式典終了後、デュマシオンは自国の公館に引き上げた。四皇家最大勢力だったコスタリカ家が所有した旧アベラール公爵邸を皇宮に代わる政治中樞ちゅうしゅうに定めたが、生活の拠点は以前と同じ、屋敷町の外れにあるちつぽけな館を使っていた。

「天下人が住まう家としちゃ、あまりにも貧相ひんそうだと思っんですけどね」

若い騎士が廊下を歩きながら肩を竦すくめた。

おどけた口調の案内役に調子を合わせるように、黒いドレスをまとった貴婦人がクスリと笑う。

「ご立派なことですわ。頂点に立つ者がご自身を厳しく律しているからこそ、下が倣うのです」

根が貧乏性なだけだ、とルティア・テラノスは思ふのだが、さすがに口外を控えた。

貴婦人は「ただ……」と言葉を付け足す。

「お屋敷の規模はともかく、立地に関しては考慮すべきでしょうね。正門前の通りが馬車の列で塞がれては何かと不都合が生じます」

「面談は議事堂（旧公爵邸）に限ると通達を出しているんですけどね。断つても断つても押しかけてきて。応対に当たるフィンデン將軍など、本来の仕事——帝國軍の再編を任されているんですけど——手が回らないって嘆いてますよ」

「……申し訳ございません。わたくしなどが押しかけて迷惑をおかけしました」

ルチャは慌てて立ち止まって振り返る。

「何をおっしゃるんですか！ 男爵夫人は別ですよ。王妃さまが誰よりも慕っておられる御方だし、デュマシオン陛下だって頼りにしているんですから」

「かえって気を遣わせてしまいましたね。卑下して

いるわけではございませんのよ。ただ、昔とは違うことを受け入れられずにいる自分が腹立たしかっただけですから」

「……………」

世間慣れたつもりでいても、かつて皇家にかしずいていた女性の心の裡まで窺い知れるものではない。慰めの言葉をかけることすら躊躇うものを感じ、ルチャは黙した。

「——お客さまをお連れいたしました」

扉の前から声をかけ、入室する。

中庭に面した狭い部屋だ。中央に向かい合うように配置された長椅子があるが、とり散らかった机や雑然と本が並び、とても貴婦人を招くような場所ではなかった。

案内したルチャは恐る恐る客人の様子を窺うが、男爵夫人は気を悪くしたふうでもなく、それどころか懐かしそうに目を細めていた。

「ようこそお越し下さいました、『黒薔薇夫人』」

机の向こう側にいた人物、二〇代も半ばを過ぎながらどこか青年の佇まいを残した男が進み出る。

「ここが陛下の隠れ家なのですね」

デユマシオンがうなずく。

「わたしたちの、です。公子時代の悪たくみは大抵この部屋で形になりました」

「では、ユーデイス卿も？」

「ええ……ちやうど貴女の前が、我が乳兄弟の指定席でした」

リュディア・パウルスは、革張りの背もたれにそつと手を伸ばし、あるはずもない温もりを感じ取ろうとした。

「入った瞬間に感じましたわ。ここにはあの御方の息遣いが残っていると……」

「床に積んだ本から、椅子の背にかけて上着まで当時のままです。わたしにとって大事な思い出の場所ですから」

デユマシオンは感慨深しげな表情をする。ローエ

ン、アモル、アグライア、ダリル……悪たくみに荷担していた者のほとんどがもういない。

その哀しみはリュディアにも痛いほどわかる。《黒薔薇派》として帝国改革に乗り出した四人の国王のうち、生者は目の前にいるデユマシオンだけとなつたのだから。

「前に進むためには時として立ち止まって後ろを振り返らなくてはならない——貴方さまにとって、明日の英気を養う場所なのでしようね」

「買い被らないでください。わたしは元来後ろ向き人間です。仲間に尻を叩かれてようやくここまできました」

退室しようとして扉をくぐりながら、案内役の青年は同意のうなずきをする。小姓として仕えた期間が長いだけに、主君の情けない面を山ほど見ていたのだから。

音もなく扉が閉まった。

リュディアは真つ直ぐデユマシオンを見据えて、

「お仲間がいなくなっても、歩みを止めるおつもりはないのでしょうか？」

「最後のひとりになったからこそ、立ち止まることは許されなくなりました」

「わたくしには到底真似ができませんわ」鍵を差し出す。「折角のご厚意ですが」と言葉を添えて。

それはサイオンに接收されていたパウルス男爵邸の鍵だ。デュマシオンが政権を獲るや、裁判をやり直させ、リュディアの復権を図るとともに屋敷他の財産、パウルス男爵領までも返還した。

「元々貴女のものです。妻サクチャーのために被った迷惑を思えば、報いたうちに入りません」

「では、お言葉に甘えてお願いがございます」

「何なりと」

「当家の財産を、モロー伯爵夫人他、お世話になった方々に分配していただきたいのです」

「男爵家を潰すおつもりか」

「家督を継がせる者もおりませんし、遠からず帝国

貴族は消滅いたします。亡夫や先祖も咎めはしないでしょう」

リュディアは聡明過ぎる女性だ。人間の裏や知りたくもない未来まで否応なく見えてしまふ。それは彼女にとつて幸せなことではなかったはず。

デュマシオンは翻意の言葉を飲み込む。優れた見識、人脈の広さを、地に埋もれさせるのはあまりにも惜しいが、彼女は百鬼夜行の世界に身を投じたがために心に大きな傷を負った。

「帝都を去るのですか」

「故郷に尼僧院を建てようと考えてます」

「妻が悲しみます。せめてイシユカークに移り住むわけにはいきませんか。もちろん僧院建立はわたしが責任をもって実現します」

「出家する意味がなくなりますわ。それに——」

リュディアは口もとを綻ばせる。

「サクチャーさまは王妃になられました。教育係などをいつまでも頼りにしてはならないのです。た

とえ、いきなり隠し子が顕れたとしても、ご自身で処理しなくてはなりません」

「そ、それは……」

今や比肩しうる者がいない天下人が、見る影もなく狼狽を顕わにした。欠点多き男だが、身内に対する脇の甘さがその最たるものだろう。

「その件に関しては、わたしも事情を把握していません。何しろ突然だったもので……」

というより、身に覚えがない。子が突然湧いて出ることなどありえないのだが、母親の腕に抱かれた赤ん坊を見ると、確かに血の繋がりがめいたものを感じる。サクヤも愛妾のエリエルも、実子であることにまったく疑いを抱かず、非難の目を向けた。

「言い訳など無用です。神に仕えようとするわたくしには関わりない俗事なのですから」

「お、お待ちを！」

怯むものを覚えつつも、デュマシオンは引き下がらなかった。

隠退、あるいは形式のみの出家ならば思いのままにさせるのもよい。しかし教義通りの出家は、財産どころか名すら捨て、縁者と関わりを一切断つ。僧院に引き籠もられたら、その国の王ですら足を踏み込むことが許されない。諭えるならば生きたまま墓所に入るのに等しい。

「貴女の信仰心をとやかくいうつもりはありませんが、動機が《黒騎士》ラングリット伯やモンドート候の死に責任を感じてならば、他にも方法があります」

「他とは？」

「帝国の行く末を見守ることです。わたしが誤った方向に導こうとしていると感じたのならば、遠慮なく正してください。それこそ彼らのみならず動乱で落命した者たちへの罪滅ぼしとなるでしょう」

「陛下ならば大丈夫ですわ」

そこで口を開きかけたデュマシオンを制して、盲信しているわけではありません。わたくしなり

に貴方さまが為そうとされていることを推察した結論です」

「どこまで見抜いておられますか？」

声が挑戦的な響きを帯びる。議会での発表どころか、ハダートやカフラーといった新しい同盟者にさえ全容を明らかにしていないのだから。

「政体に関しては、帝国以前の——《賢人帝》が築いた《ロタール連邦》を復活なされるのでしよう」

そこまでは多少目先が利く者ならば見えることだ。果たして、リュディアにはその先がある。

「ただし、陛下が《旧連邦》の焼き直しをするとも思えません。多頭政治はまとまりに欠け、その反動が《真武帝》の帝政をもたらしただからです。恐らく連邦の復活は皆さま方を納得させる方便に過ぎず、内実はより民衆寄りの共和制をもたらしそうとしているのではありませんか」

デマシオンは面白がる顔つきになる。

「さすがにいい目をしておられる。では、どのような

なものだと思えますか」

「わたくしが注目したのは、先だって発表された法整備です。これまでの帝国法は諸侯を従属させる目的で制定されたものでしかありません。極端な言い方をすれば中央に背かない限り、諸侯は自国内で絶対的な権限を有しております。民衆擁護の立場を取っておられる陛下が放置するとは思えません」

「おっしゃる通り、帝国法の改正は焦眉の急と考えています。連合、それどころかイシユカーク一國でさえわたしの目は行き届かない。ましてや五〇近い国々の集まりである帝国となれば——かといって諸侯の首をすげ替えたところで意味がない。そもそも個人の倫理観に頼ること自体が危うい。規範となる法を定め、同時に統治者の過ちを民の側からも正す制度も併せて作るつもりです」

「『知をもって治めるは、国の賊なり』ですか？」

英邁な王がひとりて国を動かそうとすれば歪みが生じる、という古い戒めだ。

「身の程を弁えていいるというだけです。それに、わたし自身枷を欲しています。とかく権力は人を変質させる魔性ですからね」

リュディアは目を細めてデュマシオンを見つめる。最初に出逢った時は高い理想を胸に秘めつつも、他人を信じ切れない、ただの青二才だった。だからこそ主導的立場に置かず、現実主義で政治手腕に長けたサイオンの脇に据えた。《バルーザ戦役》で征夷大將軍に叙された時は驚きもしたが、戦場での働きをそのまま為政者の評価に結びつけはしなかった。事実、デュマシオンは帝都に凱旋したのちも権力掌握に動こうとはせず、みすみすサイオンの奸計にはまり追放の憂き目に遭った。ある意味、リュディアの見込み通りだったといえる。

が、彼女の見立ては直後から大きく狂う。皇家の守護者となるはずだったサイオンは、野心を剥き出しにして政敵をことごとく排除にかかり、ついには皇家そのものを潰して自ら皇帝になり代わろうとし

た。一方、辺境に戻ったデュマシオンは国内外の圧力に屈することなく、逆に敵をも飲み込み帝国に対抗する勢力を築き上げた。そして両陣営は当然のごとく衝突し、結果はかくの如く、だ。

（わたくしは見誤った。能力や性格以前に、人としての器を……）

最初からデュマシオンを改革の旗手に据えていれば、違う結果を迎えていたかもしれない。帝国滅亡が回避不能な必然だったとしても、流される血はもっと少なかったのではないか。

（いいえ、そう考えること自体が驕りであり、モンデート候の死を冒瀆するものなのでしょう。わたくしには最初から帝国の運命を左右する力などありません……）

天下人となつたデュマシオンは、ロタール帝国を名実ともに葬り、新秩序をもたらそうとしている。それ自体に不満などない。皇家の再興など、もはや無意味であるばかりか、時代の逆行という意味にお

いて有害ですらある。

(サクヤーさまやスクナーさまには、カスパール皇家の血より、イスカ王家の一員であることを誇りにしていただきたい……)

デュマシオンが話を続ける。説得の意味もあるが、同時にリュディアの反応が、諸侯を説き伏せる際の参考となるからだ。

「憲法制定と同時に《新連邦》を立ち上げます。参加不参加は自由意思に任せますが、多くは加わってくれるでしょう」

従属国は数世紀にも及ぶ帝国支配により、各々の立地や風土に併せて産業が特化している。食糧自給率が五割を切る国も多く、国家間の連携が断たれればたちまち餓死者が続出する。食糧輸出国にしても買い手を失い、経済的な損失を被る。まるで困らない国はエリダーヌとその同盟国くらいものだ。

「将来的には、連合のように地域ごとの独立の動きが出てくるかも知れませんか」

「構いません。というより、流通の効率を考えればゴア、メサ、デルの三半島には独立した通商経済圏を設けるべきです」

「無理に西部域を統一するおつもりがないと？」

「どの途(みち)エリダーヌは脱退するでしょう」

彼の国は不気味な沈黙を続けている。《霸王》レクミラーの魂胆(こんたん)はまるで読めないが、差し当たって拳兵の動きがないことはありがたかった。

「要は民が安心して暮らせる環境であれば目的は達成したことになります。それに中央が必要以上の干渉を控えれば、各国も連邦という傘から抜け出すこともないと考えます」

民族、あるいは歴史上の理由から独立を望む声も生じるだろうが、結局のところ国益が優先される。一粒でも多く麦が各家庭の食卓に並ぶ体制になびくものだ。問題は各国の為政者に、どう理解させるかだった。正しいことが必ず受け入れられるならば、人間の歴史にこれほど戦は起きていない。



「つまり、支配者として君臨するのではなく、指導者として諸国を牽引けんいんしていく——それが陛下の政治姿勢なのですわ」

デュマシオンが照れ笑いを浮かべる。

「面と向かつて言葉にされると気恥きぢずかしいものですわ。しかし——」

そこでわざと強面の表情を作る。

「当面は甘い顔は見せません。弱腰と受け取り、勝手なふるまいに出る諸侯もいるでしょうから」

リュディアがくすりと笑う。

「その点は心配しておりませんわ。連合という雛型ひながたで実証なさっております」

《東テラル首長国連合》設立にあたって、デュマシオンは軍事力を背景に、各国の利害を押し潰して専横政治を断行した。当初は反発もあつたが、次々に改革を施行してその成果が形となつて浸透していくや、徐々に柔軟路線に切り替えていき、今では議会議決を遵守する、西部域内でもっとも民主的と呼べ

る政体へと変貌していた。

「狭い地域での成功がそのまま適用できるとは思っておりませんが、足がかりにはなるでしょう」

「謙遜けんそんは無用ですわ。自信がなければ、根底から覆くつがえそうなどと思はずがございませぬ」

黒衣の貴婦人は恭しくお辞儀をする。

「わたくしごときに胸の裡を明かしていただきありがとうございました。改めて出る幕などないことを思い知らされましたわ」

「そんな！」

デュマシオンが慌てて腰を浮かせる。リュディアはなだめるように、

「出る幕がないと申し上げたのは、陛下の行いを正すという意味においてですわ」

デュマシオンの顔に喜色が生じる。

「当面、出家は見合わせましよう。わたくしには《新連邦》が産声うぶごゑを上げ、ひとり歩きができるまで見守る義務があるようですから」

リユディアは女性らしい言い方で己の心情を表現した。

「差し当たつての仕事は、殺到する面会希望者を効率よく捌く者を紹介することでしょうね——うつつつけの人物がおりますわ。お客を追い返しても決して不快な気持ちにさせません。帝国貴族も多士濟々です。戦や政には不向きでも、役に立つ人材は大勢おりますのよ」

# 第1話

## 新たなる世代

西方曆1842年6月  
帝国曆237年6月



デュマシオン・イスカ・コーバック

## 1

ルイスの朝は早い。まだ薄暗いうちから寝台を抜け出し、霧に煙る庭で剣を振る。素振り三〇〇回。誰に命じられたわけでもなく自ら課した修練だ。

見るからに不釣り合いな大人用の剣を無音の気合いを込めて振る。振り下ろしが毎度同じ高さで止まるあたり、力負けしていない証だった。

一〇〇を越えるくらいで、汗で寝間着が肌に張りつく。ルイスは中断して上着を脱ぎ捨てる。まだ肉の付きが薄いのが、鍛え抜かれた肉体が顕れる。青黒く変色した無数の痣も。動かせば痛みを伴うはずだが、無表情に素振りを続ける。

二〇〇を数える頃、早朝だというのにドレスをまとい、髪も一部の乱れもなく整えられた貴婦人が訪れた。地面に投げ捨てられた衣服を拾い上げただけで、先客に声もかけず稽古を見守る。

残り二〇。ルイスの体力では疲労の極致に達する。鉛を飲んだように体が重くなり、振り下ろした際、剣尖がわずかに揺れた。だが「ここからが真の稽古だ」と師匠が教えてくれた。

ルイスの形相が変わる。全身の気を奮い立たせ、雄叫びと共に剣を振る。その息もつかず繰り出す連撃は凄まじい、の一語に尽きる。眠っていた鳥が驚き、庭の樹木から一斉に飛び立った。

定めた回数を終えると、ルイスは空を仰ぎ見て、大きく息を吸う。肌に血色が戻り、汗が吹き出す。いじめ抜かれた肉体が快復に転じる瞬間だった。

脳にも新鮮な空気が送り込まれて目眩を起こすが、体をふらつかせることは許されない。師匠がいたら拳骨が飛んでくる。裸足で地面を掴んでこらえる。どうにか氣息を整えると、ルイスはようやく傍らに顔を向けた。

「おはようございます、義母上」

三十路に届くか届かないか。少なくとも一〇代半

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。